

シリーズ①  
何が  
変わる!?

新学習指導要領スタート特集

「主体的・対話的  
で深い学び」の  
3つのポイント

早分かり(秘)  
カンタン解説

奈須が斬る!



上智大学教授  
(教育課程部会委員)  
奈須 正裕

【その3つとは】

- ① 資質・能力を育むために必要な学びの在り方
- ② 創意工夫に基づく、指導方法の不断の見直し
- ③ 「学び」という営みの本質をとらえる

「どのように学ぶか」の表現

新学習指導要領は、小中学校の内容や時数について従来の水準をほぼそのまま維持しました。一方、実現を目指す学力については、従来の「何を知っているか」という内容中心から「何ができるようになるか」という資質・能力を基盤としたものへと大幅な拡充が図られています。

「何を学ぶか」という学習内容を変えずに学力の質を高めるのですから、当然のことながら「どのように学ぶか」という学習方法=指導方法の刷新が必要になってきます。【資料1参照】

この「どのように学ぶか」の在り方を集約的に表現したのが、主体的・対話的で深い学びです。【資料2参照】

資料2の中教審答申の記述からは、**3つのポイント**が浮かび上がってきます。

資質・能力を育むために必要な学びの在り方

第1のポイントは、主体的・対話的で深い学びの実現とは、「子どもたちに求められる資質・能力を育むために必要な学びの在り方」に他ならないということです。これは資料1からも明らかですが、十分に理解されていません。例えば、主体的な学び、対話的な学び、深い学びを3つの独立した要素とみなし、それぞれに対応した場面や活動を指導案上に形式的に設定するといった実践をよく見かけますが、不適切です。【資料3参照】

資料1 主体的・対話的で深い学びは「どのように学ぶか」の刷新



資料2 中教審答申に見る「主体的・対話的で深い学び」

「主体的・対話的で深い学び」の実現とは、特定の指導方法のことで、学校教育における教員の意図性を否定することでもない。人間の生涯にわたって続く「学び」という営みの本質を捉えながら、教員が教えることにしっかりと関わり、子供たちに求められる資質・能力を育むために必要な学びの在り方を絶え間なく考え、授業の工夫・改善を重ねていくことである(2016年12月21日中央教育審議会答申 49頁)

資料3 「主体的」「対話的」「深い」は一体のもの!



もちろん、個々の工夫それ自体は必ずしも無効ではないでしょう。しかし、それらがどのような資質・能力の育成をどのような筋道でもたらすと見込んでいるのか、まずはそのことをしっかりと考える必要があります。資質・能力の実現を目指して「どのように学ぶか」を刷新していくと、どうして学びが主体的になり、対話的になっていかざるを得ないということなのです。

また、主体的・対話的で深い学びとは、教師の教授行為ではなく、子どもの側に生じる学びの質、学びの姿を表しています。さらには、質の高い学びが実現されているとき、それは主体的でもあり、対話的でもあり、深くもなっている場合が多いはずで、従って、それらを解体し個々バラバラのものとして扱うのは、およそ得策とは思えません。

創意工夫に基づく、指導方法の不断の見直し

第2のポイントは、主体的・対話的で深い学びの実現とは「必要な学びの在り方を絶え間なく考え、授業の工夫・改善を重ねていくこと」であり、「特定の指導方法」を唯一絶対のものとして指し示したりはしないということです。主体的・対話的で深い学びが提起されて以降、特定の方式や型や道具立てを喧伝するのにこの言葉を都合よく用いる動きが横行しました。しかし、主体的・対話的で深い学びの実現とは、学校と教師の「創意工夫に基づく指導方法の不断の見直し」(答申48頁)に他なりません。

注目すべきは、それが我が国の実践的伝統であり、「国際的にも高い評価を受けて」いる「授業研究」によって効果的に成し遂げられるとされている点でしょう。教育方法の刷新とは行政や学者からのトップダウンではなく、「教員がお互いの授業を検討しながら学び合い、改善していく『授業研究』」(答申48頁)のような場を基盤とし、教師一人ひとりを主体とした絶えざる日常的な営みとして進められていくべきなのです。【資料4参照】

「学校教育における教員の意図性を否定することでもない」「教員が教えることにしっかりと関わり」といった表現についても、このような「学び」の概念に立脚して考えることが重要です。つまり、「教員が教えることにしっかりと関わる」ためにこそ、まずもって目の前の子どもの知識状態を正確且つ広範に把握することが大切になってきます。そして、子どもたちがもっている、いい線はいつているが不正確であったり断片的である知識を、「各教科等の特質に応じた『見方・考え方』」に沿って洗練・統合していけるよう促したり導いたりする際に発揮されるのが、教師の意図性であり指導性なのです。

資料4 創意工夫に基づく指導方法の不断の見直し

